



## 散歩する漱石—詩と小説の間

西村, 好子

---

(Degree)

博士 (文学)

(Date of Degree)

2014-01-22

(Date of Publication)

2015-01-01

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

乙第3238号

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D2003238>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



# 論文内容の要旨

## 論文題目 散歩する漱石—詩と小説の間

氏名  
西村好子

### 論文要旨

#### 散歩する漱石—詩と小説の間

はじめに

漱石文学研究は、時代の流行の研究手法の波にいつも洗われてきた。精神分析学、実存主義、構造主義、記号論、身体論、神話学の援用により、多様な解釈が提示され、漱石文学研究は膨大を極める。

本論文の一つの軸(第一章)は、それらの研究をうけいれながらも、漱石における「俳句的なもの」の重要性を確認したいということである。漱石の文体の成立の現場に降り立ち、「文」ひいては写生文とその背後にある東洋的詩精神(漢詩文・悟り・俳味禅味・低徊趣味)について、問題提起したいと考えた。

もう一つの軸(第二章)は、当然のことながら、文学は文学だけでは成立しない。横軸には、その時代の状況があるし、縦軸には江戸から明治の激動する時代の流れという一般的な

歴史と作家の個人史があって、その接点として文学は形成されていく。漱石文学におけるその接点を析出したいと考えた。

#### 一、散歩する漱石

漱石にとつての俳句は、英文学や漢文学の知的、思弁的な世界に留まるものではなく、彼の生に身体化されていた。なぜなら、俳句が量産されたのは松山・熊本時代であり、生涯の作句数の約七割が、この時代に作られた。それらは、「一、二を除いてすべて子規に宛てた句稿」(注①)で、友情を紹介して双方向性を持つダイアログであったからである。

漱石の俳句への見方は二つある。一つは、小宮豊隆、猪野謙二、松井利彦、熊坂敦子などで自己表白的句・写実的句を評価し、俳句に盛りきれない「内面の衝動」が小説家の道を開いたとする説(注②)で、もう一つは虚子の小説などを参考に「ホトトギス」という場そのものが、俳句を踏み越える表現への志向を孕んでいたという説(注③)である。

本論文は、漱石の俳句を分類し、子規から散歩するという身体行動による写生句を学んだことが作句の基礎にあること

を評価しつつも、「俳句はレトリックを煎じ詰めたもの」という漱石の談話を参考にし、写生とともに滑稽、奇想に長けた小説的契機を秘めた人事的時間的俳句に注目した。子規への私信という側面を持ちつつ作句に現れる自己は、突き放され、笑われ、諧謔味を帯びる。その距離感が「眼」を涵養し、席題を巡る座の連衆の輻輳する視線によって、写生文の「低徊趣味」が形成され、その境地につながる「俳味禅味」が、漱石の小説の倫理的背骨を支えた。

漱石は、散歩することによって、自然と人間の対比される場所に連れ出され、写生句を詠み、それを基とした写生文を創出したのである。散歩するという身体行動が俳句という最短の詩と小説に発展する写生文を繋いだのだ。

「写生文でも書きに往つたやうに、よく話材を求めて歩き」と、碧梧桐は『子規の回想』(注④)において告白しているが、散歩という身体行動を伴った俳句の趣味を「文学の標準」(「俳句と外国文学」明三七・一)の一つとすることができるという自信が、「眼」と「手」を結び付け、漱石は、写生文家の創作態度である「大人が小供を視るの態度」(「写生文」

明四十・一)を培うことができた(注⑤)のである。

つまり、西洋の作者が神のように作品外に存在して作り出す小説に拮抗するべく、作品内存在の視点で、写生文を創出することに、漱石は価値を見出したのである。

「文学とは何か」という難問に『文学論』を書きつつ、孤立無援の闘いに挑んでいた漱石は、移入された文学を相対化できる東洋的詩精神によりその可能性を見出したと言える。

このように、本論文は、漱石の文体の成立における俳句の役割を位置づけ、(一)の1 目次番号、以下同じ)「漱石の俳句世界―作家漱石に至るまで」は、小説家になるために必須であった「手」と「眼」を、千八百句ほどの作句体験により獲得したことを論じた。

「手」について補足するなら、日本語の混乱期にあって、漢語・方言・俗語を果敢に駆使する俳句を制作することで、俳句における言文一致を達成し、漢文訓読体を骨格とする書き言葉の極端を弛め、話し言葉を基本とする写生文を制作できる自在な「手」を持つことができたのである。

結び付くためには、漱石の内部を混乱に陥れる醜なる現実という起爆剤が必要であった。隔絶していると思われた西洋文化・東洋文化の最深部での文学概念を巡るメタフィジカルな闘いと、夫婦における感情の齟齬・差異性の自覚・血族・養父との確執などのフィジカルな現実である。

すなわち、英国留学と帰国後の醜なる現実から『吾輩は猫である』(明三八・一 以下『猫』と省略)と雁行して制作された『倫敦塔』『幻影の盾』『琴のそら音』『薙露行』などの美文による『濛虚集』が編まれ、『草枕』(明三九・九)の初期小説群が誕生した。

小説を制作する「手」と「眼」がどのように結びついていたかは、(一)の3(「子規と『吾輩は猫である』」・(一)の7)『言葉の幻惑』と『国家の幻惑』―『吾輩は猫である』論」で論じた。

「猫」を「視点存在とし「甚ダ、上品ナラザル文章」(「自転車日記」明三六・六)である自在な「手」を駆使して、漱石は、当時抱いていた鬱憤をはらし、神経衰弱を治癒していた。つまり、「挿話の連鎖」(注⑥)である『猫』の「首絵

りの力学」は、科学の非人間性を俎上に載せ、残酷な話題を楽しんでいる近代知識人ひいては漱石自身の存立基盤も対象化し、戯画化している。それは、「挿話の連鎖」を超えて「言葉」による抽象化という「幻惑」となり、ひいては「国家」を射程に入れる「幻惑」に及ぶ。二重の「幻惑」を、どういうふうに、暴き立てたかという点、当時活躍した実在の人物や使用されていた日用品や愛好された食べ物や馴染みのある場所を次々と繰り出すことよってである。つまり、知識人の言葉より風俗や世相の方が信頼できた証左といえる。

それは、当時、移入されようとしている「文学」はもとより「国家」を含めた近代的なものへの強烈な不信であり、「言葉の幻惑」を剥いで「国家の幻惑」を剥出することに行き着き、江戸から明治へ急激に変化していく現実に歯止めを掛けようとしたのであろう。

もっとも、『猫』などの初期小説を英文学の影響なくしては制作できなかったという説(注⑦)もある。そういう側面を持ちつつも、『猫』第一章が、子規の残した「山会」という写生文の会で発表されたという事実を受け止めることも重要

だろう。漱石は、俳句革新、短歌革新を成し遂げた子規により、残された課題であった文章革新の場に引き出され、近代文体を成立させる役まわりを与えられ、見事にその役まわりを果たしたのだ。

西洋文化の最深处で格闘していた漱石は、ひとまず「猫」の視点を借り、その鬱憤をはらし、代わりに東洋的詩精神——悟り・俳味禅味・低徊趣味——を小説に導入して、「美を生命とする俳句的小説」（「余が『草枕』」（明三九・十一）と自注した『草枕』を創作したのである。（一の二）『俳句的小説』としての『草枕』」は、この作品が、漱石自作の漢詩や俳句のイメージを縫うように構成され、俳句や漢詩を媒介に『猫』の饒舌な口語体と『濛虚集』の華麗な文語体が融合されたことを論じた。漱石は、東洋的詩精神を、散歩という身体行動を通しての写生句から人事的時間の句を含めて写生文へと向かい、西洋から移植された小説という肉体に生かした。

その成果が初期三部作ということになる。『三四郎』（明四一・九）については、従来の研究では、三四郎の片思いだったのか、美禰子も三四郎に恋をしていたのか、二つに分かれ、

見定め難い。三四郎の視点から描かれているので、その視点に深く潜り込んでしまうと、三四郎の片思いのように読めるが、少し離れると美禰子も三四郎に恋しているように読める。

この写生文の文法については、（一の八）「混沌の文法——『永日小品』論」に詳しい。三四郎を視点存在としているので、彼もよく歩くこととなり、いわば東京案内めいた側面も見せる（注⑧）のだが、日露戦後文学と位置づけ（注⑨）、戦後不況、未亡人問題、女学生問題、性の顕在化など時代的狀況をよく掬い取っている。（一の一二）「恋愛の誕生と近代の成立——『三四郎』論」では、当時、近代の基盤となる家族を構成するための、柔らかな芯となる性的欲望で編みこまれた恋愛は輸入されたばかりで、三四郎は恋愛に伴う身体技法を身につけていない。そんな三四郎の体内にくすぶっていた未熟な近代が、美禰子に眼差されることによって炙り出されたともいえる。美禰子は意識のレベルでは野々宮に、無意識のレベルでは三四郎に惹かれ、宙吊りになっていると（一の一二）では結論した。

『それから』（明四二・六）は、代助の視点から描かれる。

けれども三千代の側に反転させると、いかにも薄幸な女性像（注⑩）を浮彫りにする。いままでの『それから』論において空白となっていた女性の視座から解釈できたのが、（一の八）「女のまなざしの中の『それから』論」である。また『それから』執筆中の漱石の日記（荒正人『増補改訂 漱石研究年表』一九八四・五 集英社）と『それから』に共通する散歩

に注目し、代助と漱石を往還して考察すると、「猫」の視点からは嘲笑されている散歩という運動に取り込まれることがよく分かる。近代化が人々の生活の中に入っていくさまが、散歩という表象となっている。

つまり、西洋文明を批判しつつ、抗いながらもその圏内に巻き込まれていかざるを得ない漱石を「散歩する漱石」という題に結晶させた。

## 二 寂しい近代

第二章は、二つめの軸である時代状況と作家の接点を論じた。当時英国で、ベストセラーだったのが、『エイルキン』で「小説『エイルキン』の批評」（明三二・八）を書いた漱石は超能力というオカルトを取り入れた小説に、疑問を抱いたまま

ま留学した。漱石は、オカルトや心靈学や催眠術が流行する十九世紀末英国に幻滅し、漢学で培われた文学と西洋の文学との懸隔に絶望し、文学とは何かという根源的な問いに応えるべく『文学論』の構想を企て（注⑪）、果てには神経衰弱を患う。身体をかけて異文化の架橋を試みたのである。

架橋の試みは、二十五歳の漱石の最初の翻訳に覗え、アーネスト・ハートの「催眠術」を『哲学会雑誌』（明二五・五）に発表している。（二の一）「漱石とオカルト——初期翻訳「催眠術」（Ernest Hart, M.D.）をめぐって——」は原文（注⑫）と漱石訳を丁寧に比較検討した。漱石の翻訳は、あくまでも日本に軸足をおいている。その結果、オカルトと科学と哲学の分別が明快でなかったこの時期、催眠術が、想像を含めての主観的狀況による感応であるという、ハートの結論を理解したことは、以後の英文学研究に生かされ、創作の豊かな源泉の一つになっただろう。

『猫』の大きな枠組みは、あの世の子規と「始終無線電信で肝胆相照らして居」るテレパシーであり、『濛虚集』は、オカルトの流行する英文学を許容できる空間と時間に宙吊り

にして再構成した作品集ということができる。

次に、(二)の4)『満韓とところどころ』(明四二・一〇)は、「汚れたテキスト」(注⑩)と忌避されてきた。体制イデオログということに繋がるこれらの批判に対して、本論は、文体の重層性という側面から論じた。写生文家の態度はここでも遺憾なく発揮され、作者と語り手との距離は伸縮自在で、語りが読者の笑いを誘い、語り手も笑われる存在に転化する『坊っちゃん』の諧謔的文体と満州で出会う旧友たちとの青春回顧という回想的文体と、胃痛に悩む作者の肉声の聞こえる文体である。日露戦争で血塗られた戦地であった満州を、この重層的文体が浄化し、日常の地平を開き、満州文学の濫觴となるとともに、空前の戦史ブーム(注⑭)に清涼な風を吹き込んだと言えよう。

しかし、廢墟のような建築途中で放置されたホテルや人通りのない大通りに潜む植民地の寂しさは近代人の寂しさに通底している。それは、近代化を強引に進めてきた日本と日本人に共通するもので、だぶらせて「寂しい近代」とタイトルを付けた。

この「満韓とところどころ」の寂しさが、『門』(明四三・三)全編を覆っている。姦通罪のあった当時、罪を犯したに等しい宗助とお米は世間から隠れたように暮らしている。にもかかわらず、お米の前夫が、あわや出現しようとし、精神不安定となった宗助は、参禅するのだが、何も得られない。

『門』は、『それから』の愛の告白後の性愛を与えようとする実験的小説であり、性愛から宗教へ至る過程も実験的である。お米の前夫は満州に旅立ち、夫婦は安堵し元の日常に戻るかに見えるのだが、二人に残されたものは、死を暗示する玄冬であり、自然の運行を含む天というものであっただろう。

あとがき

様々に漱石の作品論を書き続けてきたが、文体、生涯、時代との関わりなどをまとめるべく、今後『道草』論を用意することを通じて、漱石文学の位置を見直したい。『道草』は写生の枠を破り、その創作態度を破壊しようとしている。代わりに「自然」「天」という言葉が頻出する。ゆえに、『道草』とともに語られる「則天去私」とは何かという問題にも挑戦

したい。

また、『明暗』執筆中の午前は小説を、午後には漢詩を制作したという小説と漢詩の問題に挑み、詩と小説の間に埋められた漱石固有の東西文学の隔絶の深さを、析出したいと考える。

注

- ① 小室善幸『漱石俳句評釈』一九八三・一 明治書院
- ② 熊坂敦子『夏目漱石の研究』一九七三 桜楓社
- ③ 坪内稔典「漱石の俳句」『講座 夏目漱石』2所収(有斐閣 一九八一・八)による。
- ④ 河東碧梧桐『子規の回想』一九四四・六 昭南書房
- ⑤ 相馬庸郎『子規・虚子・碧梧桐 写生文派文学論』(洋々社 一九八六・七)に写生作家としての漱石の創作態度の指摘があり、柄谷行人『漱石論集成』(一九九二・九 第三文明社)は、カントのユーモアに関連して相馬庸郎氏と同様に解釈している。
- ⑥ 竹盛天雄『漱石 文学の端緒』一九九一・六 筑摩書房
- ⑦ 丸谷才一『闊歩する漱石』(二〇〇〇・七 講談社)や柄

谷行人『漱石論集成』(⑤参照)

- ⑧ 前田愛『幻景の街―文学の都市を歩く』(一九七八 朝日新聞社)に既に指摘。
- ⑨ 猪野謙二『それから』の思想と方法』(『明治の作家』一九六六・十一 岩波書店所収)や平岡敏夫『日露戦後文学の研究 上』(一九八五・五 有精堂)に既に指摘されているが、未亡人、女学生の性の顕在化については、本論独自である
- ⑩ 小森陽一「漱石の女たち―妹たちの系譜」(『季刊文学』一九九一、冬)に指摘がある
- ⑪ 『文学論』(明四一・五)として出版。
- ⑫ “Hypnotism, Mesmerism and the New Witchcraft” (London: Smith, Elder CO, 1896), 第二版復刻を参照
- ⑬ 中野重治「漱石の紀行―『満韓とところどころ』論―」(『國文学』一九六八・二、竹内実『日本人にとっての中国像』(春秋社 一九六六・十)、伊豆利彦『漱石と天皇制』(一九八九・九 有精堂) 大杉重男『アンチ漱石批判』(二〇〇四・九 講談社) など多数ある。

## 論文審査等の結果の要旨

論文提出者氏名	西村好子
論文題目	散歩する漱石一詩と小説の間

### 1 審査委員

区分	職名	氏名
主査	教授	福長進
副査	教授	鈴木義和
副査	教授	田中康二
副査	准教授	樋口大祐
副査	韓国ソガン大学 助教	梶尾文武

2 論文審査の結果の要旨・・・・・・・・別紙1のとおり

3 試験の結果の要旨・・・・・・・・別紙2のとおり

4 学位授与の可否

上記の論文審査及び試験の結果、並びに学力の確認の結果、論文提出者は博士（文学）の学位を得る資格があることを認める。

神戸大学大学院人文学研究科

⑭ 神戸務『日露戦争史』（一九〇六・四、四版）、独立評論社編『日露戦争実記』（一九〇四・二、二十六版、二十五万部）、桜井忠温『肉弾』（一九〇六・四、百八版 丁未出版）

### 論文審査の結果の要旨

氏名	西村 好子
論文題目	散歩する漱石—詩と小説の間

#### 要 旨

本論文は、夏目漱石における「俳句的なもの」を中心とした東洋的詩精神と、西洋的知あるいは身体作法との葛藤に注目し、その創作の総体に迫るものである。著者は、正岡子規の写生文や二葉亭四迷の小説と比較しつつ、作品の具体的な分析を通じて漱石という存在の「両面性」を明らかにしてゆく。そしてそれらの作品解釈を通じて析出されるのは、否応なく「近代」に飲み込まれざるえない一方で個人の「趣味」を貫徹しようとした、漱石という存在の両義性である。

十二の節からなる第一章「散歩する漱石」は、「詩」から出発した漱石の助走期から説き起こされる。正岡子規との交流を通じて俳句革新の現場に立ち会った漱石は、「厭世主義」に裏打ちされた個の営みとして、俳句の創作に着手した。この点に注目する著者は、俳句の実作をたどりながら、漱石が対象を様々な捉えうる視点を獲得し、近世的自然詠から近代的自然詠へと変身していった過程を解明してゆく。さらに、俳句を通じて獲得された「場」あるいは「連座的方法」に、『猫』における視点の萌芽を看取している。

この「連座的方法」の獲得過程として著者が注目するのは、写生文の朗読会「山会」の存在である。「月並」を排し、「山」のある文章を唱導した子規が希求したのは、苛酷な生の苦しみを滑稽に転化できる想像力である。『猫』における苦沙弥とそのサロンは、漱石のまなざしの中に甦った子規のまなざしによって造型されたのである。このように指摘する著者は、漱石の文章観の真髓に、『猫』に結実する漱石の「文」の理念を見出す。そこで固守されているのは、「山」のある話という口承文芸的な要素と話者の語る現在形の文体とを備えた、「文」のイメージであるとされる。

俳句的なものとの相関性において考察対象とされるもうひとつの作品が、『草枕』である。著者は、自然主義や紀行文の流行など、日露戦争後の混沌とした文学状況との関わりを踏まえつつ、西洋から移植された小説という肉体に東洋的な詩精神を生かそうとした作品として『道草』を捉える。そして生とデカダンス、漢詩・俳句と英詩といった両面性、ひいてはねじれた漱石の主体性を作品から抽出した上で、「社会を写す」という発想に漱石の写生文の特質を見出し、ここに「小説家」としての出発点を求めている。

『夢十夜』もまた、漱石が幼い頃から学んだ漢詩との連関を機軸に分析される。従来、「夢」の説話的構造を読み解くか、「夢」を紡ぎ出す作者の心的構造を読み解くかという二通りのアプローチが支配的であるなか、筆者は漢詩・俳句というエレメントを導入することによって、既存の読解の枠組みを差異化している。たとえば第四夜では、李賀の詩にみられる入水する老人のイメージが取り込まれており、第二・三夜では鎌倉円覚寺でもらった公案をうけての俳句が骨背をなしている、と著者は指摘する。また第一夜に関しても、「百年」という言葉がもつ文脈を俳句と漢詩に即して明かにし、それらのイメージが作品に寄与していることを証している。

著者は『夢十夜』と同じく「小品」というジャンルに属しながら相対的に言及されることの少ない『永日小品』をも論の射程に収めている。この作品の世界の「混沌」を、現在という時制、すなわち語り手と主人公の現在をそのまま「読者の現在」とつなげるような語りの方から解析する著者は、ここに漱石の「印象描写」

主査記載 氏名・印	福 長 進
--------------	-------

の方法的特質を求めている。最後まで全体を見透かせないこの作品の構造は、神のような超越的視点に基づく「客観描写」に対しての機軸に発するものとして解釈される。そしてその「混沌の文法」すなわち写生文という方法の生まれて来た場所として、漱石の英語と日本語と漢文という三つ巴の「言語生理」を抽出する。

こうして「東洋的詩精神」が漱石における写生文体の構築に深く関わったことを明らかにした著者は、その文体を支えるもうひとつのエレメントとして、「散歩」という身体的運動に注目する。著者は「散歩」という所作が西洋から移入され「健康」と結びつく肯定的な意味をもつものへと転換された同時代の状況を、国木田独歩の『武蔵野』や幸田露伴の『一国の首都』といった作品をもとに示す。そして、『猫』から『三四郎』『それから』における語りの視点に「散歩」という所作の影響を見出し、近代化に抗いつつもその圏域に巻き込まれざるをなかつた漱石という存在を象徴する行為としてこれを位置づけるのである。

このように、俳句・漢詩の東洋的詩精神と散歩という西洋的な身体所作が、漱石における写生文体の獲得過程に及ぼした影響を明らかにした著者は、『三四郎』と『それから』を論じた各節では、その文体が後年の小説作品においていかに運用されたかを解明する。まず『それから』論では主人公代助ではなく、視点を反転させ、三千代の側から作品世界を把握することが試みられる。「赤」という色彩がもたらす「不安」とその身体性に着目する著者は、主人公の視点を脱中心化することで薄幸な三千代を浮き上がらせ、そこから近代の女性の捨象しえない身体性を抽出する。

漱石は「西洋の歴史にあらはれた三百年の活動」を経て結晶した「恋愛」を描き続けてきた。こうした前提のもと、著者は『三四郎』論では、女学生や日露戦争後に出現した未亡人という「素人」がはじめて性的欲望の対象として認識された同時代の状況を踏まえながら、主人公の若き知識人三四郎のエロスの対象のありかたが解析される。ここでは、恋愛という不可視のイデオロギーと身体技法を戸惑いながら習得しようとしたものの、美禰子との恋愛を成就することができなかった三四郎の姿に、近代的恋愛の「原風景」を見出し、ここに描かれた「恋愛の誕生」を「日本の近代の成立」と結び付けて捉えている。

第二章「寂しい近代」では、前章で展開された文体論的・身体論的な文脈を、より広い文明論的な文脈へと開いて接続させることが試みられている。まず著者が注目するのは、漱石におけるオカルトへの関心である。著者は初期翻訳「催眠術」を同時代におけるスピリチュアリズム・精神医学・心靈学等の言説と対照し、この翻訳から引き出されてきたオカルトが、漱石における西洋文化追求の突破口となったことを論証している。

さらに『坊っちゃん』は、学校という近代的制度との関係において再解釈される。著者によれば、この「学校小説」に見られるのは、明治の社会が紡ぎ出した「学校」をめぐるパラダイムに対しての、漱石の拒否である。この意味で『坊っちゃん』は、漱石が学校という「場」から「関係」という混沌へと降りていく、その転換を示すメルクマールとして位置づけられる。また『門』を論ずる際に著者が注目するのは、「宗教」である。『それから』の「赤」と対照をなす本作の「黒」に注目する著者は、宗助と御米の世界が暗転する背景に「性」と「愛」が背理する明治の現実を見出し、この作品を「性愛と宗教をめぐる実験的小説」と規定する。さらに、宗助を襲った自己解体の危機に、漱石自身の「書くという世界」の危機を重ね合わせる。

『溝端とところどころ』を論じた最終節では、作中では滅却された日露戦争以後の地政学的状況を踏まえながら、本論文全体にわたる主題であるところの「写生文」の問題が改めて検討されている。ここで明らかにされているのは、作者自身と距離をとった語り手による語り手が読者の笑いを誘い、ひいては語り手そのものも笑われる存在に転化するという、『坊っちゃん』にも通じる語りの機微である。

如上のように、本論文は漱石における「写生文」の獲得と運用を作品解釈の核に据え、それを東洋的詩精神と近代小説あるいは近代的身体がせめぎ合う動態として把握することによって、この作家の全体像を刷新することに成功している。また、明治期日本の近代化状況とそれに対する漱石個人の倫理的意識を、作品の「混沌」と結びつける説得的な理路を開き得ている。

以上の論文審査に鑑み、本審査委員会は、論文提出者、西村好子が博士（文学）の学位を授与されるに足るとの結果に達した。